OZジャパン代表に就任した本当の理由とは? エンケイで培ったホイールへの情熱。

OZジャパンを支える唯一無の人物である内山晶弘氏。
米国海外留学を経て、ホイールサプライヤーのエンケイに就職。
ホイールのイロハを学び、OZジャパン創世記から
OZジャパン代表へと就任した本当の理由を語ってくれた。

af imp Special Interview

『ミスターオーゼット』
オーゼットジャパン
代表取締役社長
内山晶弘氏
ロングインタビュー

文◉山田弘樹　写真◉芝 修
問◉オーゼットジャパン　TEL.053-469-5011
www.oz-japan.com

なるべく日本人がいないところで英語を身につけたかった

イタリアの名門ホイールメーカーであるOZ。その日本法人OZジャパンの代表を務める内山晶弘サンは、筆者と同じ1971年生まれの若きリーダーだ。しかし当然ながら、その道程には様々な縁と努力があった。

今回はそんな内山サンがOZジャパンの代表となるまで、そして今後のアフターパーツ市場に対してどのようにアプローチをして行くかについて、じっくりとお話を伺った。

「今の自分があることについては、本当に親に感謝していますね」

1971年1月16日生まれの48歳。静岡県浜松市に生まれ育ち、高校を卒業してからアメリカの大学へ入学。今ほど留学というものが一般的ではなかった80年代に内山サンのご両親は、「これからの世の中では英語が必要になる」という理由から渡米を勧めてくれたのだという。

「まず一年は語学学校に通って、それからデラウェア州の大学に入学しました。この地を選んだのは、なるべく日本人がいないところで英語を身につけたかったからです」

ご存じの通りアメリカはクルマ社会。ここで内山サンはまず中古の初代ゴルフを手に入れた。

「安いクルマだったので雨が入って来たり、パワーウインドウが壊れるなんてしょっちゅうでした(笑)。それを自分で直しながら、友達と沢山旅行に行きました。ニューヨークまでは2〜3時間で行けますから、毎週末安宿に泊まって、庭のように遊び回っていましたよ。イエローキャブと競争したり、楽しかったな。その後はフォルクスワーゲンと縁があって、ゴルフⅡにも乗りました。もちろん中古ですけれどね(笑)」

米国留学中は大学のサッカー部に

入り、東海岸地区で決勝まで進んだ。「浜松は物心ついたときにはみんながサッカーをやっているような環境でしたから。ただアメリカでは野球やバスケ、フットボールが花形で、サッカーは人気がありませんでした(笑)。僕たちのチームには南米出身の選手がいたこともあって、結構強かったんですよ。ちなみにボクはフォワードの左ウイングでした」

こうして通算5年のアメリカ生活が終わろうとしていた頃、内山サンは就職活動で日本企業にアプローチを開始する。地元では海外進出をしているスズキ、ヤマハ発動機など名だたる企業に狙いを定めた内山サンだったが、縁があって即採用を言い渡されたのは、ホイール製造業大手のエンケイだった。

エンケイでの下積み時代に全てを叩き込まれた

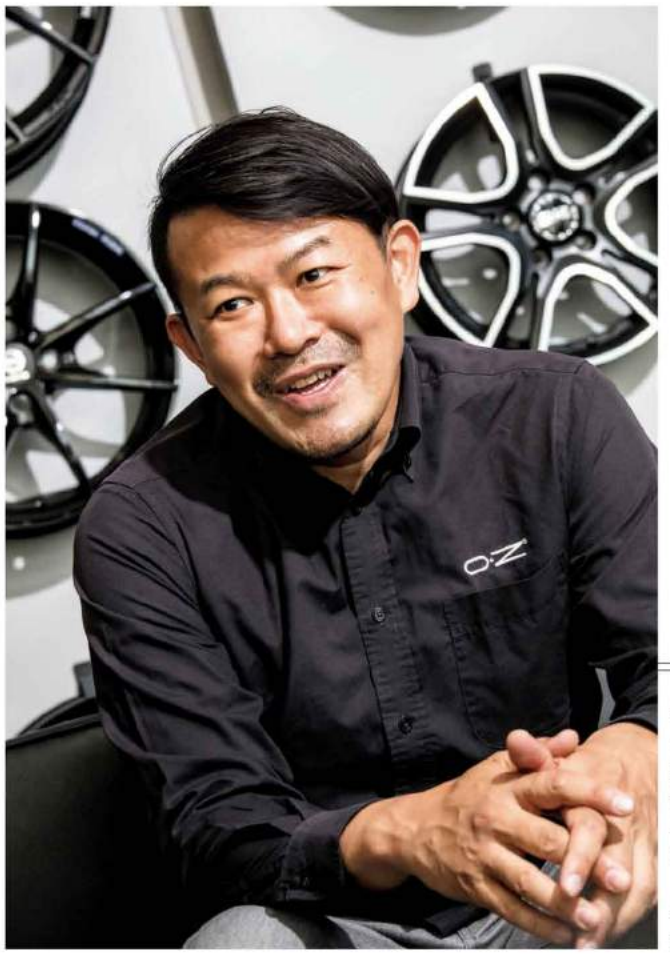
「当時エンケイでは、海外に喜んで行くような人材を求めていたんです。それをアメリカにいるときから知ってアプローチしたら、紹介してくれた方から『すぐに来てくれ!』ということになって」

ゴルフを乗り継いだとはいえ、クルマに対する知識は素人レベル。現在におけるクルマの基礎は、エンケイでの下積み時代に全てを叩き込まれたのだという。

「最初はホイールなんて、ただの部品くらいに思ってました。でもエンケイでは入社すると、最初の一年を現場でみっちり学ぶことになる。その頃はちょうど豊岡工場を立ち上げた時期で、ホイール製造のロボットをそれこそ設置するところから学び、動かし方まで習うことができました。もちろんホイールが作られる工程や、その構造についてもしっかり覚えましたよ。一日2交代制でしたが、かなりハードな現場でした。最初は60人いた同期も、半年の間で20人が辞めて行ってしまいました」

そんな内山サンだったが、予定していた研修期間を半年間で終了し、その後は浜松アクトタワー勤務を命じられる。それはエンケイのOEMやアフターマーケット、全てのホイールの営業統括本部があるセクションへの移動だった。

「同期には半年で自分が現場を離れたのを羨ましがられました。でも現場と違ってオフィス務めだと、それまでのようには残業がないから収入が下がるんです。当時工場の食堂だと150~200円で食べられた昼食も、こっちだと先輩に連れられて行く所はみんな高い。結構大変だったんですけどね」



内山晶弘氏。オーゼットジャパンといえば内山氏というほどオーゼットが日本で浸透するために献身した人物である。プロデュース能力が抜群に高く、さらに感性豊かで美的センスを持つことで、イタリアンブランドのオーゼットとの相性も良かった。人生の転機でイタリア人と対等に渡り合ったことも実に印象的なエピソードだ。

そしてこのアクトタワーで、内山サンはOZとの初対面を果たすことになる。当時OZはエンケイと業務提携をしており、海外経験を持つ内山サンが、OZジャパンのスタッフとして抜擢されたのであった。

「海外事業部に勤めていた方がアメリカへ行くことになって、ボクが指名されたんです。仕事の内容だと、イタリアとのコミュニケーションはもちろん、検品から広告制作まで、全てこの事業部でやりました。当時部署には元上司で、現在カールソン・ジャパンの高橋サンもいらして、多田サン(本誌編集長)ともよく撮影をしていましたよね。だから取材や広告撮影のやり方なんかは、お二人を見ながら覚えて行ったんです」

そして当時は、とっても大らかな時代だったと内山サンは語る。

「フッツーラやペガソといった3ピース構造の高級ホイールがものすごく売れていました。あとは初代のラリーレーシング クロノ!

当時はイタリア本社のコントロールや日本の販売形態も緩くて。本来であれば設定のないリム幅でも、他のホイールから部品を取って組み合わせたり、オーダーメイドみたいな販売もしていたんです。もちろん組み替えは、ボクがやりました。通常業務をした翌日は倉庫でひたすら組み替え作業、なんて仕事が延々と続きました。オートサロンの直前なんかは殺人的な忙しさでした」

イタリアといえば英語圏ではないイメージが強い。OZ本社とのやりとりは困らなかったのだろうか?

「OZは当時から英語でコミュニケーションできる人たちばかりでした。ヨーロッパ圏で商売をしていましたから、彼らにとっても共通語は英語だったんです。そして彼らがとても勉強熱心な人たちだということも、そのとき分かったんです」

エンケイの名作ホイール「RPF1」の開発に携わる

そんなOZだったが、なんと2001年にはエンケイとの合弁を解消。これまで出向していた日本人社員は、全員エンケイに戻ることになる。

「当然ボクもエンケイの社員ですから、会社に戻ることにしました。もちろんOZは大好きでしたけれど、好きと仕事はまた違いますからね。

それでもOZジャパンが続けられるように、できる限りの協力はしていました。ちょうどその時期に、当時の社長の息子であるアルツゥーロ・カルタが日本に来ていたんです。彼は日本企業で研修をして本国に戻るはずだったのですが、急遽OZジャパンを東京(世田谷オフィス)で再出発することになって。彼から『よい人材を紹介してくれないか?』と頼まれていたんです」

その頃内山サンは、エンケイの名作ホイールである「RPF1」の開発に携わっていた。

「RPF1の開発は既にスタートしていたんですが、ロゴをどこに置くかとか、センターキャップの仕様、

値付けや広告デザインといった部分はこれからで、それを自分が任されました。アルトゥーロからは何度か『OZジャパンに来てくれないか?』と誘われたんですが、ちょうど仕事が面白くなってきた時期で。なかなか彼の期待には、応える返事はできませんでした」

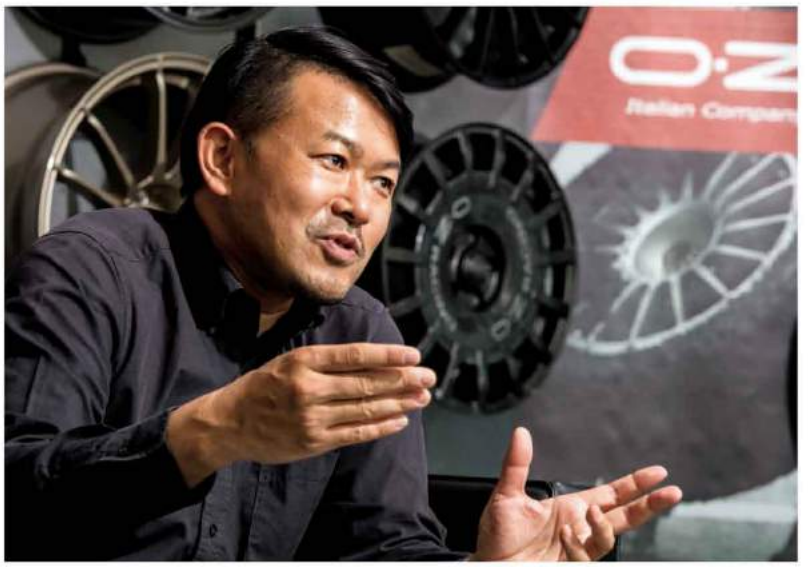
英語が堪能かつ、自動車に対する知識を持つ人材として内山サンは、RPF1のプロジェクトが一段落したとき、転職への可能性を考えるようになったのだという。

「どうせ転職するのであれば、自動車メーカーやパーツメーカーよりも、自分のキャリアが活かせるホイールメーカーの方がいいと思いました。提携は解消したけれど、エンケイとOZの関係も良好でした」

そして遂に内山サンは、OZジャパンへの移籍を決めることになる。しかし順風満帆に見えた道のりは、決して平坦なものではなかった。

むしろ紆余曲折の末に現在の、OZジャパン代表取締役の立場までたどり着いてしまったといった方が正しいかもしれない。

「当時は広報部のマネージャー的な存在で入社したんですが、まずはアルトゥーロが、『アキヒロさんが来てくれたなら安心だ』と言ってイタリアに帰ってしまったんです。



さらに困ったのは、当時のOZジャパンの経営方針に、ボクが違和感を感じてしまったことでした」

熱望されたOZジャパン移籍から急転直下の辞表提出!

内山サンがこれまでエンケイ社員として行ってきたことは、OZブランドの良さをグローバルメーカーとして表現することだった。しかし当時のOZジャパンは、OZホイールを「いちパーツとして問屋的に販売するスタイル」だったこともあり、どうしても馴染めなかったのだという。

「また企業体としては自然なことかもしれないですが、当時の会社は自分の身内で社内をまとめたい意向でした。方針も違えば人間関係もがらりと変わってしまう環境でしたから、それならば残念だけれど自分も他の道を探そうと。そして辞表を出すことにしたんです」

イタリア本社首脳陣は内山サンの残留を強く希望。37歳で代表取締役へと就任した。

熱望された移籍から、急転直下の辞表提出! しかしここからも、すんなりと事が進むことはなかった。

「当時の会社からは、自分が辞めるにしても後任を探す必要があるから『とりあえず半年待って欲しい』と言われました。とはいえボクも職探しはしなければいけません。そして数社からオファーを頂く状況にも恵まれたのですが、なかなか後任探しを進めて頂けなくて。ようやく4ヶ月経ったところで『辞めていい』となりました」

しかし運命の歯車は、既に思わぬ方向に回り出していた。

「自分が辞めるにしても、イタリア本社にはきちんとそれを伝えて下さい、とお願いしました。そしたら本社が、『どういうことだ』と大騒ぎになりまして。とにかく代表とふたりで、イタリアまで来いということになってしまったんです」

急遽チケットを取ったふたりは、OZ本社へと赴くこととなった。

「そうは言っても自分は既に次の仕事も見つけていますし、住むところも決まっている。気持ちは完全に次の新天地に向かっていて、辞める気マンマンの状態なわけです」

ここでイタリア本社首脳陣は内山サンの残留を強く希望した。そして、逆に辞めさせる立場であったはずの代表が、話し合いの末会社を去ることになってしまったのだった。

「滞在中はもう、『残ってくれよ』『むりむりむり!』の繰り返しでした(笑)。本当に無理だと思っていたのでそれならと、当時会社で疑問に思っていた部分を洗いざらい話して、『それが受け入れられるならOK』と言ったのです」

なんとそれが全て、通ってしまったのだった。しかも内山サンは、代表取締役としてOZジャパンへの帰還をオファーされたのである。

「ホイールに限らずですが、こうした商品はデザイン、性能、価格、納期といった要素、全てのコンビネーションで商品性が決まります。ですからまずイタリアには、納期の遅さを改善してもらうように言いました。

代表取締役になれ、と言われたことにはちょっと驚きました。ただ当時は世田谷オフィスでしたが、無理して東京に本社を置かなくてもボクはいいと考えていたので、地元浜松への移転を提案しました。この地にはクオリティの高い関連企業も沢山ありますし、ボク自身もエンケイとは交流が続いていましたから。そしてこの提案を、イタリア本社は全て納得してくれたんです」

納得できる理由があるのなら、それはきちんと受け入れる。まさにそれはヨーロッパの合理的なビジネススタイルだと内山サンは語る。

「今は時期柄難しいですが、普段であれば年に数回はイタリア本社からスタッフが浜松に訪れます。またボクたちも、イタリアに赴きます」

こうして内山晶弘氏は、今からおよそ12年前の2008年、OZジャパンの代表取締役に就任した。それは37歳という若さでの大抜擢であったが、むしろここからが、本当の意味でのスタートとなったのであった。

続きは、af imp web (https:www.automesseweb.jp) で掲載いたします。